

---

# いつもそばに

伊東ユリ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

いつもそばに

### 【Nコード】

N8200F

### 【作者名】

伊東ユリ

### 【あらすじ】

年号が昭和から泰成に変わってすでに25年がたっていた。昭和と泰成では良い部分も悪い部分も大きく変わったと言う者は多い。柊流依と友人であり主人である橘昭斗は、修華学院高等部2年で、そのルックスから女子学生に絶大な支持を受けていた。しかし、柊流依には秘密があり、流依が幼いころ亡くなった父親の言葉が心から離れないのだった。流依と昭斗が進む先で彼らは何を失ってしまったのか・・・2人はこれから先も変わらずにいられるのか・・・初めての小説です。感想、アドバイスいただけるとうれしいです！

## プロローグ

2人はついさつき出された宿題をひるげながら、いつものように部屋でおしゃべりをしていた。

「昭斗は大人になったら何かしたいことある？」

「うーん、いっぱいあるよ。」

飛行機のパイロットになって世界中をみたいとも思うし、テニスプレイヤーになって毎日コートを走りまわりたいとも思うし、あと医者とか大工にもなりたいなあ」

午後の陽射しが優しくふりそそぐこの部屋は、9歳の子供2人のための部屋にしては広すぎるように感じるかもしれない。

部屋には彼らが寝起きしている大きなベッドが1つ、本を読むときによく座る大きなソファが1つ、そしてさつきまで授業をしていて今も2人が使っている大きなテーブルが1つ。

この部屋にあるほとんどの調度品が2人が同時に同じことができるような大きさなのである。

さつきまで行われていた授業で教師は世界の偉人についての話をした。

教師は偉人と言われる人がどんな子供時代を過ごし、どんな職業に就き、どんな人生を辿ったのかを2人の興味に合わせて話してくれた。

授業後、2人は自分たちの未来について話した。

昭斗はいくつもやりたい職業をあげていく。

「でもどれか1つをえらばなきゃいけないんだよねー。」

どれにしよー。」

「……………」

「流依？どうしたの？」

「……………むかしお父さんが言ってたこと、思いだしてた。」

「流依のお父さんが？」

なに？」

流依は父親が亡くなる少し前に、自分に話してくれた言葉をより鮮明に思い出そうと、今よりも幼かったころの記憶を手繰りよせようとした。

「たしか、えらぶことは捨てることだって。」

「……………よくわかんないよ。」

なぜ父親がこんな話をするようになったのかは思い出せない。

しかし、あの時の父親の言葉の一部は思い出すことができた。

「流依、いいかい。生きていくかぎり、人はえらびつづけなければならぬんだ。」

「ただどね、なにかをえらぶことはなにかを捨てることでもあるんだよ……………」

流依は父親の言葉を思いだしたとたん、なぜか嬉しさと悲しさを同時に感じていた。

「ねえ、流依。」

今のどういう意味なの？」

「よくわかんないけどすごく大事なことだった気がする。」

本当に大事なこと・・・」

「そっか。」

昭斗は流依の返答に納得できなかったが、いつになく真面目な表情の流依に、いつもの調子で聞くことができず、とりあえず理解したふりをした。

その3年後、流依はえらぶことが捨てることであるということを実感する。

そしてさらに5年の月日が流れ、彼らは高校2年生になった。

## 第1話 守るためならば

年号が昭和から泰成に変わってすでに25年になる。

良い部分も悪い部分も昭和と泰成とでは大きく変わってしまったと言われている。

しかし、泰成という時代しか知らない柊流依と橘昭斗にとって、そんなことはどうでもよかった。

毎日の学校生活を2人で楽しく過ごせる時代であるならば昭和も泰成も同じだった。

この日も2人はいつものように橘家の自動車で登校する。

流依は車の窓から、外を歩く修華学院の女子生徒の数人が楽しそうにおしゃべりをしている姿をみてため息を漏らした。

「流依ー、ため息なんて、どうしたんだ？」

眠そうな表情の昭斗がいたずらっぽく調子で聞いてきた。

事情をすべて知っているはずの昭斗の態度を嫌そうに見て、流依は昭斗の問いに答える。

「例のあのこが外を歩いてただけだよ！」

「もしか最初は僕のこと好きだったのに、流依君が口説きまくっ

た結果、流依君に乗り換えたあのこかい？」

昭斗が楽しそうにつづける。

「あのこ、流依君にぞっこんってやつですよね。

なのに流依君たら、好きにさせた責任もとらずに放置。

ひどいなあー。」

「うるさいなー。

仕事なんだからしょうがないだろ。

たくっ、誰のためだと思ってるんだよ。」

不機嫌な表情の流依を昭斗はニコニコしてみている。

昭斗があまりにも楽しそうな笑顔なので、流依もつられて笑ってしまった。

そうこうしているうちに2人を乗せた車は修華学院高等部の校舎前に到着した。

流依は軽くまわりをうかがってから車から降り、昭斗がそれに続いた。

少し風が強いが、天気がよく、たくさん 학생들이互いに朝のあいさつをかわしている。

2人が校舎に向かって歩いていけると、後ろから声をかけられた。

「昭斗君、流依君！

おはようー！」

ふりかえって声の主を確認した流依は、気が重くなったのがはつきりわかった。

そこにいたのはクラスメイトの女子3人だった。

その中に木島よりがいた。

たぶん声をかけたのも彼女だ。

要注意人物。

流依は自分のモードを切り替えた。

最近、木島よりとその友達は何斗の前によく現れる。

彼女が何斗に気があるのは、いつも何斗と一緒にいる流依には明らかだった。

昨日の昼休みも、教室で弁当を食べている何斗と流依のもとへ木島よりと数人の女子がやってきて、何斗の誕生日やら血液型やらを聞いて、自分との相性についてしゃべっていた。

「来月学祭だけど、何斗君は誰かとまわる約束してる?」

木島よりがとびきりの笑顔で聞いてきた。

何斗は愛想よく質問に答える。

そうするようにならされている。



人に好印象を持たせるのはお手のものだ。

「約束してるわけじゃないけど流依とまわるよ。な、流依？」

「ああ。そうだな。

でも俺はよりちゃんとも2人でまわりないな。」

流依も昭斗に劣らず愛想よく、木島よりに向かって話した。

そうすれば木島よりの気持ちが昭斗から流依に変わるかもしれない。

流依は昭斗の評判を守るためにいつも気をつけている。

もしも木島よりが昭斗に告白なんかして断ったときに誰かが腹を立てたり、変な噂をたてられては、昭斗にとってプラスになることはない。

そうなるくらいだったら自分に気持ちを向かせてしまった方が昭斗を守りやすい。

自分に気持ちが向いたとしてもその気持ちに応える気はないのだが。

その結果、女たらしの女泣かせと言われようともかまわない。

流依にはそれくらいの覚悟がある。

たぶん木島よりも最近では昭斗と同じくらい流依のことを気にしている。

しかし、昭斗の悪い噂を聞くことはないが、流依に関してはたくさん  
の女子生徒が泣かされているという噂があり、木島よりだけでな  
く多くの女子生徒が流依を警戒しているようだ。

それでも中性的な整った容姿で成績もトップクラスの流依にやさし  
い言葉をかけられたりほめられたりすると多くの女子生徒が恋して  
しまうのだ。

「よりちゃんは誰かと約束してる？」

「もしよかったら1時間くらい俺と一緒にみてわかってよ」

流依は木島よりにやさしい笑顔を向けた。

「え？あ、でも流依くんなら私じゃなくても一緒にまわってくれる  
女の子いるじゃない。」

木島よりは少しびっくりしたようだったがうれしそうだ。

「そんなことないよー。」

それに、よりちゃんかわいいしもっと仲良くなりたいたいんだ！  
ね？1時間だけ学祭は俺と2人でいよ？」

木島よりは顔を赤らめて小さく頷いた。

「じゃあ約束だよ！」

そろそろホームルームの時間だな。

昭斗、早く教室行くぞー。」

「おー」

昭斗は平静を装っているが内心では今の一連の流れが面白くてしょうがなかったはずだ。

たぶん家に帰ったら昭斗にからかわれるだろうな、と流依は思ったがいつものことだ。

さっきの木島よりの反応から近いうちに気持ちは流依に向かうと昭斗も流依も予想した。

また流依は女の子に悲しい想いをさせることになる。

それでも……

昭斗、君のためになるなら他の誰が傷ついてもいいと思う。

俺ってひどい人間だな。

でもそれが俺の仕事だし、俺がえらんだ道なんだ。

そのことを理解してくれるからいつも俺のすることをからかってくるんだよな。

俺が辛くなりすぎないように。

ありがとう。

何があっても側にいるよ・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8200f/>

---

いつもそばに

2011年1月6日02時20分発行